



ドライブレコーダーを業務中の安全運転指導に活用するための極意

TOPICS



株式会社データ・テック
代表取締役 田野 通保

はじめに

近年、ドライブレコーダー(以下、ドラレコ)の需要が高まっています。ドラレコの映像は、事故があったときの証拠となることもありますので、万が一に備えて装着されている方も多いのではないのでしょうか。ドラレコは、とっさの運転を記録するものとして認識されていますが、普段の運転から日常の安全運転指導に活用できると、より効果的だと思います。なぜなら、普段の運転の中にも荒い運転が潜んでいるからです。

図表1のように事故は氷山の一角であり、その中に潜んでいる荒い運転(運転のクセ)を見つけ、改善することが事故削減につながります。ドラレコを購入した事業者の声として、「ドラレコは事故映像取得が目的で、教育に利用できない。教育に利用できるドラレコを購入したい。」というものがたくさんあります。ドラレコには、事故映像だけでなく、普段の運転を評価し、事故の起きない運転をドライバーに提供し、事故を未然に防ぐ機器としての活用方法があります。

事故率が非常に低い事業者は、日常の運転においてもドラレコのデータを活用しています。今回は、ドラレコを日常の安全運転指導に活用するための極意を実際の例を挙げながらお伝えします。

1 交通事故の傾向について

まず、交通事故はどのような場合に発生しているのかを見ていきます。図表2の発生速度別の交通事故割合からわかるように、実は時速30km以下の事故が大半を占めています。つまり法定速度を守ることだけでは、事故はなくなります。例えば、夕方の路地は子どもや自転車に注意が必要で、むしろ法定速度以下での運転を促す必要があります。その上で、速度に応じたブレーキ操作

やハンドル操作を心がける必要があります。次に、図表3の発生場所別の交通事故割合をみると、交差点での事故が大半を占めています。交差点は人通りの多い場所です。交差点に進入するまでの減速の仕方、交差点を通過中の速度なども指導する必要があります。交差点で一時停止をルール化している事業者もいます。これらのことからわかりますように、交通事故は通常速度帯や一般道で発生しているため、日常の運転を見ていく必要があります。

2 活用の極意その① ~簡単なデータを使う~

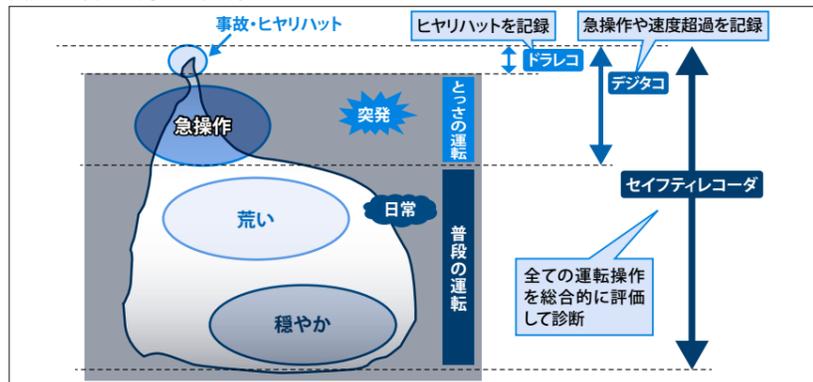
ドラレコの中には、運転診断などの日々の運転を点数化する機能が付いているものが

ありますので、そのデータを使って安全運転指導に役立てることができます。例えば、ある事業者では、月単位で集計をとり、一人ひとりの運転傾向を分析しています。その結果、集計表を使った運転傾向は大きく5つのパターンがあることがわかりました。(図表4)

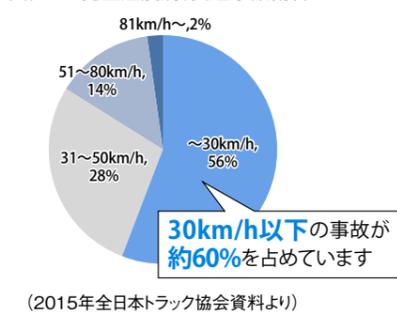
この中で、①②のタイプのドライバーは安全運転に意識的に取り組んでおり、モチベーションを保って運転しています。このタイプの場合は、管理者の方がドライバーを褒めることが大切です。ただし、②のタイプで、低得点で推移している場合は、ドライバーが伸び悩んでいますので、適切なアドバイスをすることが必要です。

一方、③④⑤のタイプの場合は、モチベーションが下がっていたり、気持ちに余裕がなかったりしている場合がありますので、管理者の方はドライバーにヒアリングをし、適切な

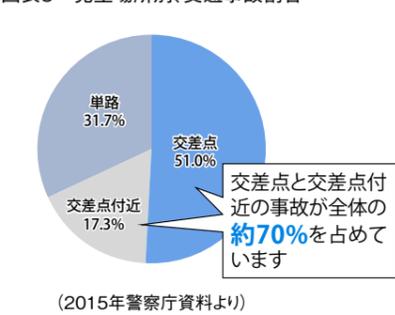
図表1 安全に対する考え方



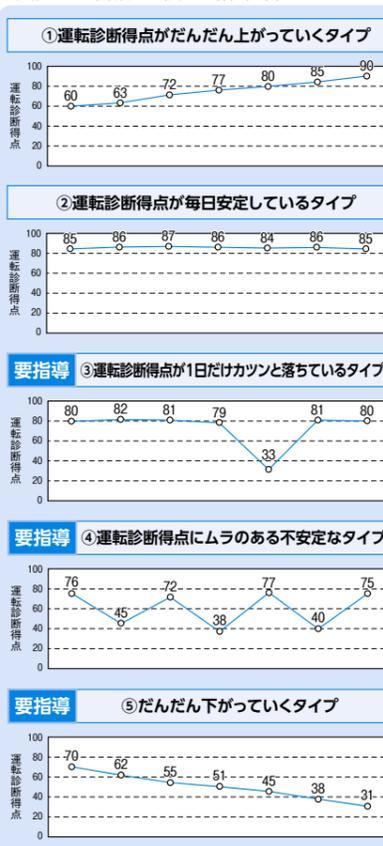
図表2 発生速度別、交通事故割合



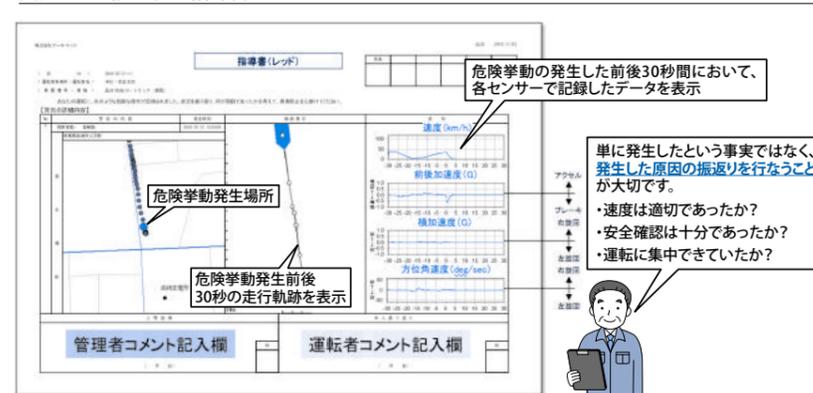
図表3 発生場所別、交通事故割合



図表4 集計表を使った指導方法パターン



図表5 危険運転の指導書



図表6 バックに関する日報

Table with 2 main sections: 'バック情報' (Backup info) and a detailed table of backup incidents with columns for No., Gear on time, Start time, Location, Max speed, Avg speed, Distance, and Gear on after 3s.

アドバイスをする必要があります。その中でも③のタイプのように、いつもは安全運転なのに、1日だけ点数が低い場合は、その日だけいつもと違う状況であったことを表わしています。業務が忙しかったのか、何か不安な出来事があったのか等、その原因に耳を傾けることが大切です。

このようなことを日々行えば、ドライバーの心理状況や運転のクセを把握でき、適切な指導をすることが可能になり安全運転につながります。

3 活用の極意その② ~危険運転があったときの指導ポイント~

危険運転があった場合は、ドライバー自らの振り返りを促す雰囲気づくりが大切です。「危険挙動があったことを申告したら叱られた」「協見をしていたことを正直に話したら怒られた」といった雰囲気の中では、ドライバーによる正直な振り返りや、更にその先の原因追及は望まれません。管理者は運転者に対し、必要な指導はしつつも、申告したことや正しに運転を振り返っていること自体を十分認めてあげることが大切です。

ある事業者では、図表5を使って、危険運転があったら必ず本社に報告し、本社ベースでの事例研究に取り組んでおられます。本社では、危険運転に対して、法令の遵守、速度、車間距離、右左折時の徐行・一旦停

止など様々な角度から分析し、危険運転への警告を行っています。更に、危険運転が2回以上あった場合は、添乗指導を実施するなど安全運転への更なる意識向上を図っています。

4 活用の極意その③ ~バック事故ゼロを目指して~

最近、通常走行での事故は減ったが、構内事故・バック事故がなかなか減らないと悩んでいる事業者も多いと思われます。バックアイカメラだけに頼らず、ドライバーのバック操作を改善する方法があります。例えば、バック操作は、速度が人の歩く速度を超えると周囲の人は「危ない」と感じます。また、安全確認が不十分で、バックし始める前の停止時間が短い場合も周囲の人は「危ない」と感じます。そのため、バック速度と安全確認のための時間を見る化し、日々の指導に役立てて事故を減らすことが必要です。

ある事業者では、バックし始める前に3秒安全確認をルール化しています。ルールスタート時は、安全確認よりもただ漠然と時間だけを気にしていたドライバーが大半だったようですが、1運行での3秒ルールの目標値を設定し、帰着後、管理者が図表6の太枠部分を確認・指導を行った結果、ドライバー自身が後方の安全確認する習慣が身についたとのことです。

5 まとめ

ドラレコなどの安全機器は、取り付けたら終わりではなく、取り付けから効果を出すまでが本当の目的です。

そのためには、例えばバック時の3秒安全確認ルールを徹底するなどの目標を決めること、誰でもすぐに認識できる簡単なデータを使うこと、安全運転したことを褒める文化を育てること等、会社全体で取り組むことが大切です。

会社プロフィール

会社名: 株式会社データ・テック
所在地: 東京都大田区西蒲田7-37-10
グリーンプレイス蒲田11階
事業案内: 1995年に世界で初めて「VR用小型3軸角度センサー」を生み出し、その技術を更に発展させ、1998年に世界初、運転診断ができるドライブレコーダー「セイフティレコーダー」を開発・製品化。更にIoT化を推進するためSR-WEB解析システム等のネットワークサービスの充実化を進めている。

- その他
・ 東京大学生産技術研究所とビッグデータ解析による事故予兆解析ロジックを共同研究中
・ 平成26年2月 車載器メーカー初、道路交通安全マネジメントISO39001を取得
・ 平成29年12月 経済産業省の地域未来牽引企業に選定

URL: http://dateac.co.jp